『無情』を書いたころの李光洙

波田野　節　子

Yi Gwang-su in writing "Mu-jong (Heartless)"

Setsuko HATANO

1．はじめに

李光洙（1892－1950）の長編『無情』（1917年）は朝鮮近代文学で最初の長編小説とされる作品である。筆者は以前おこなった研究で、李光洙が『無情』を書くにいたるまでの生活と思想の変遷をたどった。日露戦争がおわる1905年に日本に留学した李光洙は、東京の明治学院普通部で中学時代を過ごしている時、文学に目を開いて創作を始めた。1910年に卒業して故郷の五山学校の教師となったが1915年に再度留学し、早稲田大学在学中に『無情』を書いたのである。筆者はこれらの時期に関していくつかの論文を書いたあと[1]、しばらく李光洙研究から離れていた。だが最近、文部科学省からの補助を得て、日本と韓国の研究者による共同研究を始めたことを契機に、李光洙研究を再開した。本研究はその一環である[2]。

この十年のあいだに新しい資料が発見され、また李光洙の周囲にいた人物の全集が出ているので[3]、それらの助けを借りて、李光洙および彼とかかわりのある２人の女性――のちに李光洙と結婚した許英粛（1897－1975）と韓国で最初の女性西洋画家になった羅蕙錫（1896－1948）――の留学時代の年表を作成し、文末に提示した。３つの年表をつきあわせ、李光洙がこの時期に書いたいくつかの作品の内容との関連性を考えながら、このころ李光洙の内面に何が起きていたかをさぐってみたい。なお、朝鮮語からの引用文はすべて筆者の訳である。

2．朝鮮語メディア

1910年の日韓併合の前に李光洙が朝鮮語で作品を発表したメディアは、朝鮮国内では崔南善が出していた『少年』誌、東京では留学生の団体大韓興学会の機関誌『大韓興学報』の２つである。李光洙は五山学校の教師になったのちも創作をつづけたが、８月の併合によって朝鮮語メディアは消滅し、彼の創作活動も中断した。その後、学校教育と故郷の農村の啓蒙活動に専心していた彼は、しだいにその生活に行き詰まりを感じるようになり、1913年の末にはついに大陸放浪の旅に出る。そして、第１次世界大戦勃発を契機にいったん朝鮮に戻ってきたものの、翌年の1915年にはふたたび東京に留学する。

日韓併合後の朝鮮では、最初のころ朝鮮語メディアは総督府の新聞『毎日申報』しかなかった。しかし1914年に、２つの重要なメディアが誕生する。４月に留学生団体「学友会」が東京で創刊した『學之光』と、10月に崔南善がソウルで創刊した文学雑誌『青春』である。李光洙の大学時代の創作活動はこの３つのメディアを舞台に行なわれることになる。

1914年夏、第１次世界大戦の勃発を契機に朝鮮に戻ってきた李光洙は、12月の『青春』第３号に紀行文「上海にて」を発表することで、執筆活動を再開した。年表にあるように、この第３号のあと、第４号、第６号にも李光洙の作品は『青春』に掲載されているので、現在は発見されていない第５号にも彼の作品が掲載されて

国際教養学科

いる可能性は大きい。1915年３月に第６号を出したあと『青春』誌は停刊となり（1917年５月に再刊される）、李光洙の発表舞台は『學之光』にうつる。

留学直前の５月、李光洙は『學之光』第５号に初めて「共和国の滅亡」という論説を投稿した。この時期の『學之光』には、わかち書きをまったくしていない論説や純漢文の論説が多かったが、「共和国の滅亡」はほぼ完璧なわかち書きで書かれており、それによって生じた空白部分の多さが読者の目をひきつける。興味深いのは、李光洙式のわかち書きのスタイルが、号を重ねるにしたがって、他の執筆者にも影響を与えていくように見えることである。若者たちのオピニオンリーダであったこの時期の李光洙は、あるいは文章スタイルの面でもリード役を務めていたのではないかと想像される。

３．『學之光』第８号

1915年９月に早稲田大学高等予科に入学した李光洙は、12月に有志とともに「朝鮮学会」を設立し、翌年１月29日には第１回研究会で農村問題に関する発表を行なった[4]。おそらくこのときに発表した内容が、『學之光』第８号（1916年３月発行）に載っている「龍洞（農村問題研究に関する実例）」ではないかと推測される。著者は、目次では白衣（흰옷）、本文では帝釈山人となっている。しかし「龍洞」は李光洙が五山学校での教師時代に啓蒙活動をおこなっていた村の名前であり、末尾に記された執筆日（1916,1,24）が研究会の５日前であることも、この推測を傍証する。「龍洞」は、五山学校校主李昇薫の出身村である龍洞で李光洙がおこなった農民啓蒙活動の記録であり、この年の11月から翌年の２月まで、『毎日申報』に連載された啓蒙論説「農村啓発」は、この記録を土台にしてフィクションの要素をおりこんだものだと思われる。

ところで、この『學之光』第８号は韓国には原本が存在していなかったものを、早稲田大学教授の布袋敏博氏が2002年に米国ワシントンの議会図書館（Library of Congress）で発見したものである。[5]『學之光』第８号には李光洙の作品がいくつか掲載されており、おかげで筆者はいくつかの重要な発見をすることができた。

１つ目は、いま述べたように、「農村啓発」には土台となった記録「龍洞」があったことである。２つ目は、1917年に『青春』誌に３回にわたって連載された李光洙の書簡体小説「幼き友に」[6]と同じタイトルをもつ詩の存在である。書簡体小説「幼き友に」は、タイトルを「若い夢」と変えて1926年刊行の単行本『若い夢』に収められているが[7]、その序文で李光洙は、これを書いたのは1914年、大陸放浪から帰って五山にいるときであると明言している[8]。後述するように、内容から見てこの書簡体小説は1917年に書かれたと推測されるにもかかわらず、著者がこのように書いているために、研究上、混乱が生じていた[9]。だが同じタイトルを持つ詩が存在することがわかったことで、李光洙が小説と詩とを混同して記憶してしまったのではないかという推測が可能になった。

３つ目は、羅蕙錫と李光洙の関係を推測させる「クリスマスの夜」という短編の存在である。「クリスマスの夜」の筆者は「거울」となっているが、内容から見て李光洙であることはまず間違いない。小説の主人公は、東京に二度目の留学中の金京華である。京華がクリスマスの晩に見たピアノ演奏者は、最初の留学時に愛した女性Ｏ嬢だった。既婚者であるという理由でＯ嬢の兄の反対を受けて絶望した京華は自殺未遂をして帰国し、さまざまな経験をへたのちにふたたび留学してきたのだった。Ｏ嬢を見たあと、京華はこれまでのことを回想して物思いにしずむ。

「既婚者であるゆえに受ける兄の反対」というモチーフは、李光洙の長編『彼の自叙伝』（1936年）や先述の書簡体小説「幼き友に」にも見られる。とりわけ「幼き友に」と「クリスマスの夜」ではこのモチーフのほかにも、主人公とヒロインが初めて会う場所（寄宿舎の応接室／〇〇女学校応接室）、その時のヒロインが横わけでおさげを垂らしていること、口癖のように何度も発する「お忙しいのに」という言葉、主人公が失恋のあとに企図したのが鉄道自殺であること（これは明治学院時代に李光洙が書いた最初の日本語小説「愛か」とも共通する）などが共通しており、「クリスマスの夜」のＯ嬢

と「幼き友に」の金一蓮のイメージは非常に似通っている。

金一蓮に羅蕙錫の面影があることは以前から指摘されており、二人の間に恋愛関係があったという推測もなされている[10]。しかし資料年表を見れば明らかなように、李光洙が最初の留学時代に羅蕙錫と出会うのは無理である。また、李光洙が東京に来たのは全集年譜によれば1915年5月だが、このとき羅蕙錫は朝鮮におり、11月には東京女子美術学校に復学したものの、直後に父を失い、また恋人が病気で帰国するなど、非常にあわただしい生活を送っている。彼らの出会いはこの1915年の末ころではないかと推測されるが、李光洙が羅蕙錫と実際に恋愛関係になり、別れてから「クリスマスの夜」を書いたという推測は時間的に見て難しい。おそらく李光洙は彼女に強い印象を受けるか、魅了されたが、このときには恋愛関係にはいたらず、それにもかかわらず兄の羅景錫から何か言われてショックを受けたのではないだろうか。そして、そのイメージを膨らませて「クリスマスの夜」を書いたのだと想像される。

羅蕙錫は、『無情』の登場人物である東京留学生ピョンウクと不思議なほど共通点が多い。ともに芸術を専攻しており（羅蕙錫は女子美術学校西洋画科／ピョンウクは東京の音楽学校）理解ある兄（羅景錫／ピョングク）と留学生である恋人（慶応大学留学生・崔承九／貧しい留学生で名は不明）、そして結婚を強要する父がいることなどである。そのうえ羅蕙錫が1918年に発表した小説「キョンヒ」の主人公キョンヒの人間像は、家事を合理的に楽しみながら行なう『無情』のピョンウクのすがたを髣髴とさせる。李光洙と羅蕙錫の間に何らかの関係があったことは間違いない。「クリスマスの夜」の発表時は恋愛関係になかったとしても、この小説をきっかけとして、二人はこの後かなり親しい間柄になったのではないだろうか。

4．許英肅との出会い

1916年9月、李光洙は高等予科を卒業して早稲田大学文学部哲学科に入学した。そして、このころから『毎日申報』に論説を掲載するようになり、翌年1月には長編『無情』の連載をはじめる。彼自身の回想によれば、『無情』を書き始めたのは1916年の末である。新聞社から依頼をうけた彼は、書きためてあった原稿の中から「英采」に関する部分を取り出して休み中に約70回分（全126回）を書いて送ったという。

筆者は以前に書いた論文で、主人公のヒョンシクが京城学校を辞めて根を失ったような喪失感を味わい、山に入って僧侶になりたいと夢想している場面（72･73節）を取りあげて、これはこの時期の李光洙自身の内面であると指摘した[11]。同じころに書かれたと推測される3つの短編「尹光浩」(執筆1917年1月11日)「少年の悲哀」（同1917年1月10日）「彷徨」（同1917年1月17日）には、このときの彼が精神的に危機的な状態にあったことを思わせる深い孤独感があらわれている[12]。『無情』の前半で英采の悲しい物語を書きながら、李光洙は自分の辛かった幼年時代と少年時代を思い出し、孤独感と闘いながらこれからどうやって生きていけばいいのかを模索していたのだと思われる。見逃してならないのは、この時期、彼の体が結核に蝕まれていたことである。当時、孤独な留学生がこの病気にかかることはほとんど死を意味していた[13]。

ところが、25歳の誕生日を迎えた2月22日に書いた「二十五年を振り返って愛しい妹へ」を読むと、彼はこの孤独感を克服したかに見える。

「序幕は失敗だった。（中略）しかしこのさき中幕と大團圓が残っているので、まだ彼ら（観客―引用者）を満足させる機会は十分ある。僕はいま楽屋にいて、心をこめて扮装をしているところだ。僕の口には希望の微笑がある」[14]

そして彼は、自分に四葉のクローバー（四葉槿）を送ってくれた遠く離れた妹に「熱い愛」を送るのである。

同じころ、『無情』の内部でも新しい動きが起きている。虚脱感におちいっていた『無情』の主人公ヒョンシクはソニョンと婚約して「近代的恋愛」を開始し、英采もピョンウクと出会ってあらたな人生を生きはじめる。そして最後に、ヒョンシクは三浪津で民族の指導者としての使命を自覚して、自らの身分上昇を正当化す

るのである。

筆者は先の論文のなかで、作品内部の変化と李光洙のこの「再起」とを結びつけ、この時期の李光洙は東京で新しい生活を始める決意をもったのだろうと推測した。だが、そのころは羅蕙錫の全集も出ておらず、『學之光』第８号も未発見であったため、それが具体的にはどういうものであるかは推測できなかった。今回、李光洙と羅蕙錫と許英肅３人のこの時期の年表を作成し、「クリスマスの夜」「二十五年を振り返って愛しい妹へ」「幼き友に」、および『彼の自叙伝』[15]に見られる「既婚者であるゆえに受ける兄の反対」モチーフの部分を読み比べてみると、李光洙に「再起」の力を与えたものが何であるか、おぼろげながら推測された。

先に見たように、李光洙は羅蕙錫とは1915年末ころに知り合っているが、許英肅との出会いは『無情』を執筆中の1917年初めころであった。のちに朝鮮で最初の女医となる許英肅はこのころ東京女子医学専門学校学生で、肺結核の治療のために病院に来た李光洙と出会って同情し、治療薬を届けてやったという[16]。『無情』の連載を終えてから『毎日申報』に連載する『五道踏破旅行』のために朝鮮にもどるとき、李光洙は許英肅に健康上の相談をし、彼女は恩師に診察してもらって旅行可能という返事を出した。ところが旅の途中で李光洙が倒れたことを新聞記事で知ってひどく心配し、そこから同情が愛へと変わっていったようである[17]。李光洙にとって許英肅は、「近代的恋愛」の対象であるだけではなく、現実に病気といっしょに戦ってくれる同志でもあった。こうして許英肅は李光洙のあらたな生の契機となったのである。

この秋、羅蕙錫と許英肅は雑誌『女子界』でともに編集員となって活動し、李光洙は賛助として参加している。３人のこのような関係を視野に入れて「幼き友に」を読み直すと、これまで見えていなかったある関係が見えてくる。この作品では、主人公が「幼き友に向かって「あなた」と呼びかけながら、金一蓮との再会を語るが、最初ははっきりしなかった「あなた」の姿は、後半に進むにつれてしだいにはっきりとしてくる。

「ここはおそらく黄海のようです。ここからまっすぐ北に飛んでいけば、あなたがいらっしゃる故郷なのでしょう」（『青春』10号 p.26）

「こんななかでも脳裏から離れないのは恋人のことで、あなたと一蓮への思いは心中に雑念がなくなればなくなるほど、いよいよ鮮明で切実なものとなるのです」（同 p.27）

「この波に彼らの手をとって逍遥したならば」（同）

「なにゆえに私は生まれ、なにゆえに金一蓮は生まれ、なにゆえにあなたは生まれたのでしょう。そして私はなんのために小白山脈を走り、あなたはなんのために漢江のほとりにとどまっているのでしょうか」（『青春』11号 p.137）

金一蓮と「あなた」のあいだをさまよう主人公は、おそらくは李光洙自身であったのだろう。許英肅と出会った李光洙は、故郷の五山で夢見ていた「近代的恋愛」をついに実践することになり、彼女たちとの交際がかもしだす緊張感のなかで、このあと『開拓者』を執筆することになったのだと想像される。

４．おわりに

筆者は2007年12月にソウル大学で行なわれた大学院生国際交換プログラム（The International Exchange Program for Graduate Students in Korean Literature）の講師に招かれて韓国語で発表をおこなった。本稿はその発表要旨を日本語に直して、大幅に修正したものである。なお、発表要旨はそのままの形で韓国の文学雑誌『文学思想』2008年１月号に掲載されている。

当日、筆者の発表の討論者は延世大学のキム・ヒョンジュ氏だった。氏の質問は李光洙の「再起」のきっかけとなったのは、「クリスマスの夜」にある「新しい恋人」＝「ペダル（倍達：檀君神話に出てくる国の名前で朝鮮民族の象徴―引用者）ではないかというものであった。再度の留学をしているとき、李光洙は総督府の機関紙『毎日申報』に啓蒙論説を発表する言論活

動によって、以前とは違った形で民族に奉仕する可能性を見出した、それがペダル＝朝鮮民族という「新しい恋人」であり、彼の「再起」の原動力ではなかったかという趣旨である。

じつは筆者は、これと同じ趣旨の質問を、2007年11月17日に新潟で開催した科研共同研究の新潟プレシンポジウムで、研究協力者である延世大学の金栄敏教授から受けていた。キム・ヒョンジュ氏は質問の前置きで金栄敏教授の意見でもあると断っておられるので、筆者は2度同じ質問を受けたことになる。1度目の質問を受けたとき、はっきりと答えられず、あとで調べようと思いながら怠慢のために後回しにしているうちに、また同じ質問を受けてしまった。恥ずかしいかぎりである。この場を借りて、「クリスマスの夜」のテキストに沿いながら答えたいと思う。

李光洙は「クリスマスの夜」の中に、過去におきたさまざまな経験（あるいは過去におこなった想像）をもりこんでいる。既婚でありながらO嬢に手紙を送ったことでO嬢の兄の糾弾を受けたという部分は、最近会った羅蕙錫がモデルであるが、渋谷の鉄道線路に横たわるのは「愛か」にも出てくるエピソードであり、最初の留学時代が下敷きにされている。このあと学校をやめて帰国したあとしばらくは酒に狂って人の笑いものになったという部分は、中学卒業後に五山学校に赴任した直後の李光洙のすがたである。そのころの自分はバイロンを任じて連日長酔していたと「金鏡」で李光洙は回想している[18]。

だが李光洙は、数ヶ月でこのような生活に終止符を打ち、彼は五山で民族のために奉仕するというあらたな生きがいを見出して、五山学校と龍洞で自己犠牲的なまでの生活を送る。そして、やがてその生活に疲れはてて大陸放浪に出るのである。

「そのとき万一新しい恋人に会わなかったならば、永遠に酒狂いになってしまったことだろう。だが私は幸か不幸か一人の新しい恋人に出会った。それは誰か。ペダルであった。私はこの新しい恋人のために献身することを決心した」（「クリスマスの夜」―傍点引用者）

これは、中学を卒業して五山に赴任した李光洙が、朝鮮と東京のギャップに苦しんでしばらく自暴自棄の生活を送ったあとで、民族奉仕というあらたな目的を見出した経験のことを語ったものだと思われる。そして、

「それも長く続かず、その恋人も死んでしまった。私は恋人の墓をかきいだいて私の不幸を慟哭し、しかたなく東西八方へと漂浪しはじめた」（同上）

という部分は、教員生活に行き詰まりを感じて大陸放浪に出たことを意味し、

「そして生きていくあいだ関心をもてる何か求めて、ふたたび東京に出てきたのだ」（同上）

というのは、大陸放浪から一度は五山にもどったものの、結局はふたたび東京に留学してきた彼自身の軌跡を語っているのである。こうして李光洙は「クリスマスの夜」の中に、主人公の回想として、自分自身の過去を時間の順序にそって織り込んだのである。

以上で見たように、「クリスマスの夜」で語られている「新しい恋人」とは、1916年の東京ではなく1910年の五山で李光洙が見出した「民族」のことである。自分を「健全な朝鮮人」[19]にしてくれた五山に感謝して李光洙は民族奉仕活動に全力をそそいだが、やがて心身とも疲れ果て、新しい学校経営者となった教会と対立し、同時に自分自身をさらに飛躍させたいという欲望にとらわれて、結局、五山を飛び出すことになった。東京に出てきたあとしばらくのあいだ、李光洙は「朝鮮と婚姻」[20]できなかったという慙愧の念から抜け出せなかった。彼の「再起」が始まるのは『無情』を執筆中であった1917年初めであり、「クリスマスの夜」が発表された1916年3月には李光洙はまだ孤独のなかで将来を模索していたと推測される。

なお、1917年に始まった「再起」の原動力が許英粛という女性だけではなく、キム・ヒョンジュ氏が主張したように言論活動というあらたな形態の民族奉仕であったことに、筆者も同意する。1916年秋から李光洙は『毎日申報』とい

う新たな媒体を得て、健康をかえりみないほどのすさまじさで論説を発表していた。五山では民族への奉仕者に徹することができなかった李光洙は、言論活動という形で民族への奉仕ができる可能性を見出していたのである。

するどい質問によって刺激を与えてくれた金榮敏教授とキム・ヒョンジュ氏に、この場を借りて感謝の意を表する。

1　以下の論文である。
①「光洙の民族主義思想と進化論」、『朝鮮学報』第136輯　1990年7月　②「李光洙の自我―作品を通して見た李光洙の第一次留学時代の世界観―」、『朝鮮学報』第139輯、1991年4月　③「<文学の価値>について―李光洙の初期文学観―」、『大谷森繁博士還暦記念朝鮮文学論叢』、杉山書店、1992年3月　④「獄中豪傑の世界―李光洙の中学時代の読書歴と日本文学―」、『朝鮮学報』第143輯、1992年4月　⑤「ヒョンシクの意識と行動にあらわれた李光洙の人間認識―『無情』研究（上）」『朝鮮学報』第148輯　1993年7月　⑥「京城学校でおきたこと―『無情』の研究（中）」、『朝鮮学報』第152輯、1994年7月　⑦「上海報告―李光洙の上海―」、『北東アジア地域の諸問題――県立新潟女子短期大学国際教養学科　北東アジア地域研究報告書』、1995年3月　⑧「ヨンチェ・ソニョン・三浪津―『無情』の研究（下）」『朝鮮学報』第157輯、1995年10月。これらの論文は2008年4月に「『無情』研究―韓国啓蒙文学の光と影」というタイトルで白帝社から刊行する予定である。

2　平成18－20年度基盤研究（B）課題名：「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」、代表：波田野節子

3　以下のような研究である。
①徐正子編『晶月羅蕙錫全集』国学資料院（ソウル）、2001　②李相瓊編集校閲『羅蕙錫全集』太学社（ソウル）、2000　③李相瓊『人間として生きたい』ハンギル社（ソウル）、2000　④布袋敏博「『学之光』小考」『大谷森繁博士古希記念朝鮮文学論叢』白帝社、2002

4　『學之光』第10号の우리消息　参照

5　本稿注2の④書

6　『青春』第9号、第10号、第11号

7　『젊은 꿈』博文書館、1926

8　「『젊은 꿈』自序」、『李光洙全集』第19巻、三中堂、1963

9　三枝壽勝は「『無情』における類型的要素について」（『朝鮮学報』第117輯、）において、「幼き友へ」と「開拓者」は李光洙と許英肅との恋愛に直接関係する作品であり、「幼き友へ」の執筆時期は『無情』連載当時であると推定している。(22頁)

10　李相瓊『人間として生きたい』p.129
金允植『改訂増補　李光洙とその時代1』ソル出版社（ソウル）、1999、p.626

11　「京城学校でおきたこと―『無情』の研究（中）」、p.101

12　「少年の悲哀」は『青春』8号（1917年6月）、「彷徨」は『青春』12号（1918年3月）、「尹光浩」は『青春』13号（1918年4月）に掲載されたが、それぞれの末尾に執筆完了日が明示されている。

13　李光洙との出会いを回想して、許英肅はこう語っている。「世話をする人がなければ、あの人はかならずやまもなく死ぬであろうと思われました。（中略）この肺結核という病気は世間ではかならず死ぬ病気だと思っていますが、そうではないのです。時期を逃さず、お金を惜しまず、医者の指示通り規則的な治療を受けさえすれば、きっと治る病気なのです。(『女性』第4巻第2号、1939.2、p.22)

14　『學之光』12号、1917年4月

15　1936年12月～1937年5月『朝鮮日報』連載

16　『女性』第4巻第2号、1939.2、p.22

17　同上

18　「金鏡」、『李光洙全集1』三中堂、1962、p.541

19　同上、p.542

20　「彷徨」、『李光洙全集14』三中堂、1962、p.67

李光洙・羅薫錫・許英肅の留学時代

	雑誌刊行状況	李光洙(1892年生)	羅薫錫(1896年生)	許英肅(1897年生)
1910 (明治43)年	1/15『少年』3年1巻 1/20『大韓興学報』9号 2/20『大韓興学報』10号 2/15『少年』3年2巻 3/15『少年』3年3巻 3/20『大韓興学報』11号 4/20『大韓興学報』12号 4/15『少年』3年4巻 5/15『少年』3年5巻 5/20『大韓興学報』13号 6/15『少年』3年6巻 7/15『少年』3年7巻 8/15『少年』3年8巻	「獄中豪傑」(興9) 「今日我韓青年과情育」(興10) 「어린 犧牲(上)」(少3·2) 「어린 犧牲(中)」(少) 「文學의価値」「無情」(興11) 3月、明治学院普通部を卒業 五山学校の教師として赴任 「日本에在한我韓留学生을論함」「無情」(興12) 「어린 犧牲(下)」(少3·5) 「곰」「今日我韓青年의境遇」(少3·6) 「朝鮮사람인 青年들에게」「天才」「献身者」 「余의 自覚한 人生」(少3·8) 8/29 日韓併合 朝鮮語メディアは『毎日申報』のみとなる	6月、삼일女学校卒業 9/1 進明女学校入学	
1911 (明治44)年				進明女学校卒業(?)
1912 (明治45· 大正元)年				漢城学校を卒業して来日し、東京女子医学専門学校へ[1]
1913 (大正2)年		2月、「검둥의 선용」(新文館) 11月、大陸放浪の旅に出る	3/28 進明女学校卒業 4/15 東京私立女子美術学校入学 西洋画部普通科入学	
1914 (大正3)年	4/2『学之光』創刊 (1,2号未詳) 10/1『青春』創刊 11/1『青春』2号 12/1『青春』3号 12/3『学之光』3号	 8月、朝鮮にもどる 「上海에서(第一信)」(青3)	4月、2年生に進級 崔承九と恋愛 「理想的婦人」(学3) 父が結婚強要。黄州で教員生活	
1915 (大正4)年	1/1『青春』4号 2月『青春』5号未詳 2/27『学之光』4号 3/1『青春』6号 5/2『学之光』5号(発禁)[2] 7/23『学之光』6号	「上海에서(第二信)」(青4) 「金鏡」「海参威에」etc.(青6) このあと『青春』は〈国是違反〉で停刊 「共和国의滅亡」(学5) 5月、東京へ[3] 8月、長男震根誕生 9月30日、早稲田大学高等予科文学科入学 12月末日、朝鮮学会設立	 4月、朝鮮女子留学生親睦会設立 (京城か?) 11月、高等師範科1年生に転入するが登校できず 12月10日、父が死亡 年末、崔承九が療養のため帰国	

1916 (大正5)年	1/21『学之光』7号(発禁) 3/5『学之光』8号(発禁) 布袋氏発見 5/23『学之光』9号(発禁) 9/4『学之光』10号	1/29　朝鮮学会第1回会合で農村問題に関して発表[4] 「幼き友へ」「クリスマスの晩」「親潮」(学光8) 7月5日、高等予科を卒業 9月、早稲田大学大学部文学科哲学科入学 9月から『毎日申報』に「大邱에서」「東京雑信」「文学이란何오」「早婚の悪習」「教育家諸氏へ」「農村啓発」「朝鮮家庭의改革」などを発表	?　高興に行き崔承九に会う 『学之光』8号に崔承九死亡記事 4月、女子美高等師範科1年生に復学	
1917 (大正6)年	1月『学之光』11号[5] 4/19『学之光』12号 5/16『青春』再刊7号 6/16『青春』8号 7月『女子界』創刊 7月『学之光』13号 7/26『青春』9号 9/26『青春』10号 11/16『青春』11号 『女子界』編集賛助 11月～3月『開拓者』連載 12/20『学之光』14号	1月～6月、『無情』連載 「爲先 眼가 되고 然後에 人이 외라」「闇恨」(学11) 「天才여、天才여」「二十五年をふりかえって愛しい妹へ(2/22執筆)」etc.(学12) 「거울과 마조 안자」(青7) 6月、五道踏査に出る 「少年의悲哀(1917.1.10朝)」(青8) 6月～9月『毎日申報』に「五道踏破記」 7月、特待生として2年生に進級 「」 「어린벗에게(第1.2信)」(青9) 「어린벗에게(第3信)」(青10) 「어린벗에게(第4信)」(青11)	4月、女子美の学制変更で高等師範科3年生に　「雑感」(学12) 「雑感—K姉に与う」(学13) 夏、京都に滞在して金雨英と交際 10月17日、女子親睦会臨時総会：『女子界』編集部員になる。同部員に許英肅、賛助として李光洙(『女子界』2号)	このころ李光洙と出会う 五道踏破旅行に出られるか恩師に診断してもらう 旅の途中倒れた李光洙を心配する[6] 『女子界』編集部員
1918 (大正7)年	3/16『青春』12号 3/22『女子界』2号 3/25『学之光』15号 4/16『青春』13号 『学之光』16号押収 6/16『青春』14号 8/15『学之光』17号 9/26『青春』15号 『女子界』3号	「彷徨(1917.1.17)」(青12) 「尹光浩(1917.1.11)」(青13) 「意志論的進化論」(学16) 7月、早稲田大学3年生に進級 10月、許英肅と北京へ逃避行 11月、帰国　12月、日本へ	3月、女子美卒業 「경희」(女2) 4月、帰国(金雨英は司法試験準備のため残る)母校で教鞭をとるが8月に退職 9月、「回生한 손녀에게」(女3)	7月、卒業 8月、帰国 北京へ
1919年	1月『学之光』18号(特別号) 2/1『創造』創刊	2月、2・8独立宣言起草ののち上海に亡命	3月、三一運動に参加、5ヶ月獄中	
1920年	1/26『学之光』19号 3月『女子界』4号	5月、『創造』6号に「미광」 7月、『創造』7号に「H君에게」	6月、金雨英と結婚	恵英病院開院[7]
1921年		1月、『創造』8号に「文士와修業」 4月、帰国 5月、許英肅と結婚 7月、『開闢』に「中枢階級의社会」		2月、上海へ 5月、李光洙と結婚

[1]「15歳のとき漢城学校という中学校を卒業して即時日本に渡り、氏は医学専門学校まで卒業した」(「許英肅氏外 四名 兄任」,『三千里』2月号、1932)とあるので、計算すると許英肅は1912年に来日したことになる。彼女の卒業は6年後の1918年である。1912年に女子医専に入学したある卒業生(神戸美和:URL参照)は4年後の1916年に卒業しているので当時は4年制だったようだ。あるいは許英肅は来日後すぐに入学したのではなく、しばらく日本語の勉強などをしてから医専に入学したのかもしれない。なお、その卒業生は卒業後2年間の研修期間をへてから医師資格を取得している。許英肅は卒業した年に総督府の医師試験を受けて医師免許を取得しているので、日本内地と朝鮮半島とでは医師資格の条件が違っていたのかもしれない。

URL　http://www.pref.miyazaki.lg.jp/contents/org/chiiki/seikatu/miyazaki101/hito/092/092.html

[2]「大正三年(月日不詳)ノ創刊ニ係ル月刊雑誌『学之光』ハ學友會(本巻第二(二)参照)ノ機関雑誌トシテ発行セラレツツアリ同誌ハ創刊以来断続常ナク大正六年四月二十二日迄ニ号ヲ累ヌルコト十二号其ノ間発売頒布禁止処分ニ付セラレタルモノ第五号(大正四年五月二日発行)、第七号(大正五年一月二十一日発行)、第八号(大正五年三月五日)、第九号(大正五年五月二十三日発行)、第十号(大正五年九月四日発行)ノ五部ナリシカ斯クテハ経費ノ関係上自然発行を継続スル能ハサルニ到ラムコトヲ慮リ発行人玄相允(甲号早稲田大学生)ハ常稿原文中治安ニ妨害アルカ如キ不穏ノ字句ハ努メテ之ヲ改竄抱殺スルコトトナシタルノ結果最近発行ノモノハ内容稍ゝ穏健ニ趨キタルノ跡ナキニアラサレトモ仍適ゝ国権回復等の意味アル文章ノ混淆セルヲ認ムヘシ」「5-19　朝鮮人概況　第一」　大正6年5月31日調べ　警保局　1917年5月31日活版刷　『特高警察関係資料集成　第32巻』荻野富士夫編　不二出版　2004。発禁処分をうけた『学之光』のうち5号は復刻本に収められている。

[3] 三中堂全集の年譜による

[4]『学之光』10号　消息欄

[5]『学之光』11号は布袋敏博氏が発見したが、奥付ページがなく刊行月日不明。

[6]『女性』第4巻第2号、1939.2

[7] 朴宣美、『朝鮮女性の知の回遊―植民地文化支配と東京留学』　山川出版社、2005、p.146